

●ブナ原生林残る秘境

日本列島最南端の天然スキー場がある五ヶ瀬町鞍岡の向坂山（一、六八四^{メートル}）から椎葉村の扇山（一、六六一^{メートル}）付近に至る尾根筋の古道が一般に「霧立越（きりたちごえ）」と呼ばれ、近年、にわかに脚光を浴びるようになった。

この間は県指定天然記念物で石灰岩の植物群落地・白岩山（一、六四六^{メートル}）もある自然の宝库。地元鞍岡の「霧立越の歴史と自然を考える会（秋本治会長）」の掘り起こしで、秘境の自然の素晴らしさが紹介され、存在が知られるようになった。

九州中央山地国定公園の熊本県境の小川岳（一、五四二^{メートル}）や向坂・白岩などを総称して「霧立山地」と呼んでおり、古い地図には霧立越を特定する表示はない。尾根の一部は以前、「椎葉越」と呼んだ時代もあった。

霧立越へは、鞍岡地区から尾根筋までの距離



「自然の恵み資料館」。木地師など山里の生活を伝える

が長く、難路であった。現在は尾根近くまで車で行けるようになり、冬のスキーのほか自然探索や森林浴などでブナの原生林にも出合え、四季を通して楽しめる登山道になっている。

この秘境の山道や峠には多くの歴史のロマン、山で生きた先人たちの息吹が残っている。源平合戦の壇の浦で敗れた平家一門の落ち武者たちも、この霧立越を身を引かずるように登ったのであろう。そして一門の追討のため、鞍岡を出た那須大八郎宗久は、道のあまりの険しさに、馬のくらを村里に置いてきたという。

霧立越山系にはこの一帯を生活の場とした木地師（きじし）の集団もいた。五ヶ瀬町史によると、椎葉山地から祖母山（高千穂町）にかけて、自然林地帯の八合目以上は木地師公認の入会地であった。木地師は自由に樹木を切ってはるるろを回し、食器のわんや盆をくり抜き、里

人に売って生計を立てていた。

同町史に正徳六（一七一六）年、鞍岡村木地屋長右衛門が山林奉行へあてた記録がある。さらに、明和三（一七六六）年、鞍岡山に九軒、高千穂の五ヶ所村に四軒の木地屋があったとある。町の「自然の恵み資料館」には、木地師の史料が展示され、五ヶ所・祖母山ろくの一枚野には、木地屋敷の名が残る。

尾根続きの霧立越を昔、椎葉村の人々は肥後・馬見原（蘇陽町）から牛馬で物資を運び、往来したという。今も歌い継がれている椎葉の民謡「駄賃付け歌」は、霧立越や国見峠越の馬子唄であったのではなからうか。

確井哲也